

# 学 位 論 文 要 約

Comparison of neurocognitive function in major depressive disorder, bipolar disorder, and schizophrenia in later life: A cross-sectional study of euthymic or remitted, non-demented patients using the Japanese version of the brief assessment of cognition in schizophrenia (BACS-J)

(老年期における大うつ病性障害、双極性障害、統合失調症の神経認知機能の比較：日本版統合失調症認知機能簡易評価尺度（BACS-J）を用いた、躁うつ寛解期の又は寛解した非認知症患者の横断研究）

大うつ病、双極性障害、統合失調症は正常気分や寛解の状態においても認知機能障害と関連している。これら3疾患において、中年期までの神経認知機能の比較は行われてきたが、老年期における神経認知機能の研究は主に単一疾患で行われてきた。したがって、老年期においてこれら3疾患における神経認知機能を直接比較した研究はない。本研究では、認知症でなく、かつ精神症状が正常気分または寛解状態にある老年期におけるこれら3疾患群で神経認知機能を比較した。

## 方 法

本横断研究の対象は、倉吉病院精神科または鳥取大学医学部附属病院精神科に通院中の外来患者60名（60歳 - 79歳、大うつ病、双極性障害、統合失調症各群20名）である。患者は精神障害の診断と統計マニュアル（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-IV、DSM-IV）で前記3疾患のいずれかと診断された。組み入れ基準である、双極性障害患者は少なくとも4週間正常気分であること、大うつ病、統合失調症患者は少なくとも4週間以上症状寛解にあることは主治医が確認した。神経認知機能の評価は日本版統合失調症認知機能簡易評価尺度（the Japanese version of the Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia、BACS-J）で行い、その結果を統計学的に検討した。

## 結 果

分散分析の結果、BACS-J（Z score）の運動速度、語流暢、注意と情報処理速度の3下位項目およびcomposite scoreで有意差を認めた。多重比較の結果、大うつ病は双極性障害よりも運動速度において有意に障害の程度が軽かった。さらに、大うつ病は双極性障害、統

合失調症よりも言語流暢、注意と情報処理速度において有意に障害の程度が軽かった。加えて、大うつ病は双極性障害、統合失調症よりもcomposite scoreにおいて有意に障害の程度が軽かった。他方、言語記憶、作業記憶、遂行機能では有意差を認めなかった。双極性障害と統合失調症は全ての認知機能領域とcomposite scoreにおいて同程度の認知機能障害を認めた。

## 考 察

双極性障害、統合失調症は同程度の認知機能障害を示す一方、大うつ病はいくつかの認知機能領域とcomposite scoreにおいて双極性障害、統合失調症よりも障害の程度が軽度であった。各疾患とも運動機能、遂行機能が相対的に高く、注意と情報処理速度が相対的に低く、認知機能のプロフィールは類似した。高齢者において精神疾患による認知機能障害の相違は量的なものであることが示唆された。

## 結 論

老年期では、双極性障害、統合失調症は同程度の認知機能障害を示す一方、大うつ病はいくつかの認知機能領域とcomposite scoreで双極性障害、統合失調症よりも障害の程度が軽度であった。3群の認知機能障害のプロフィールは類似し、老年期での認知機能障害の差は質的よりは量的と考えられた。